東林寺堰の思い出

宮城　すみ子

子供の頃、家の近くに堰があった。四十センチから五十センチ幅位のコンクリート製の細い橋が掛っていたが私達子供は慣れたものでさして注意もせずこの橋を渡って遊んだ。そのためよくつまずいて川に落ちたものだ。

この堰を子供達は「とうれんぜき」と呼んでいた。私は渡りにくいからそう呼ばれているのだろうと勝手に解釈していたが大人になってから、東林寺の下辺りに位置しているので「東林寺堰」と呼ばれたことを知った。

我家は私が二才の時東京から東林寺堰が目の前の土地に移り住んで来た。来たばかりの時は川辺の掘っ建て小屋で、暫くの間風呂は祖父母が川の水を汲んで焚き木で沸かした。ある時沸いた湯に小魚が浮き上がったのを不思議と今でも覚えている。それだけ川の水がきれいだったようで夏などは堰の手前の深みで近所の子供達が泳いで遊んでいた。

勿論堰は米作りのために存在し、東林寺堰の水は堰の横に設けた用水路を通って下麻生方面の耕地に流れていたときいている。

夫は毎日のようにこの辺りの川で遊んでいた子供のひとりだ。台風で堰の手前の木製の橋が壊れて流されて来た時、子供どうしで筏乗りごっこと称し、ずぶ濡れになって遊んだそうだ。ある時いたずらして堰の杭を抜き、大切な水を流してしまい親に大目玉を食らったと、夫は六十年以上前の苦い失敗を、思い出し笑いしながら楽しそうに話してくれた。

その東林寺堰も昭和四十三年からの河川改修のために姿を消した。川は埋め立てられ用水路の一部だけが寂しく残っている。

令和四年（2022年）記